

# 貧しくとも

# 心豊かに生きた

# 歌人、橘曙覧



橘曙覧肖像(寿像)  
(福井市橘曙覧記念文学館蔵)

『万葉集』などの古歌に学び、日常の生活を題材にした赤裸々な作風で知られる幕末福井の国学者・歌人、橘曙覧。その歌と清貧の生活に共鳴した松平春嶽は彼を歌の師と仰ぎました。春嶽をはじめ多くの人を魅了する曙覧の歌や生き方は、どのような秘密があるのでしょうか。

曙覧は、文化9（1812）年、旧福井城下石場町（現在の福井市つくも1丁目）で、文具などを扱う商家に生まれました。「橘」は氏で、奈良時代の政治家・歌人として知ら

れる橘諸兄が遠祖と伝わっており、曙覧の苗字は「正玄」です。その正玄家の後継ぎとして育ちますが、早くに父母と死別し、学問を志すようになり、家督を異母弟の宣に譲って愛宕山（現在の足羽山）に隠棲。妻子を持ちますが、学問と和歌に打ちこんでいきました。天保15（1844）年、曙覧の歌人としての方向を決める契機が訪れます。曙覧（当時32歳）は国学を学ぶため、飛騨高山の田中大秀の門に入りました。大秀は国学四大人の一人、本居宣長の高弟です。実は、『万葉集』を特に尊ぶ曙覧の志向は、大

秀という人物を通して本居学から学んだものでしょう。曙覧は宣長を非常に敬慕しました。その敬慕の大きさは、大安禅寺にある曙覧の奥墓が宣長のそれに模して造られていることにも表われているとみられます。

嘉永元（1848）年、曙覧は足羽山から三橋町（現在の福井市照手2丁目）に居を移し、新宅を藁屋と称しました。その後、元治2（1865）年、中根雪江らを介して和歌のやりとりをしていた春嶽は曙覧の藁家を訪ねます。春嶽は曙覧に「家の名を「わらや」と呼ぶのはふさわしくない。ひたすら古典を通して昔の心を忍ぶ家と改めるがよい。貧しいけれども曙覧の心は風流を理解し優雅である。これが大変慕わしい」と伝えました（『橘曙覧の家』）。曙覧は歌人であると同時に国学者であり、国学の裏付けがあったからこそ、自由に生き自由に詠みました。そして、そこから発した人生観によって清貧といわれる生活に身を置いていたのです。こうした姿は、身分を越えて春嶽の心を打つものだったのです。曙覧は、生涯を通じ多くの文人と

も交流して福井において歌で一家を成しましたが、あくまでも中央歌壇からは孤高の立場をとり続け、慶応4（1868）年8月、明治改元を目前にしてこの世を去りました。その後、長男井手今滋により刊行された遺歌集『志濃夫廼舎歌集』によって、その作品は全国に広く知られ、正岡子規・釈迺空（折口信夫）など多くの後進から近世末期の代表的な歌人として高い評価を受けています。

## 関連史料・ゆかりの地

### 橘曙覧他一家奥墓



橘曙覧の希望によって、彼が晩年に住職や地元の人々と親交が深く、またその風景をこよなく愛した大安禅寺の境内に葬られました。曙覧の妻、直子や親族の墓もあります。

【住所】福井市田ノ谷町  
(JR 福井駅より京福バス鮎川線・川西三国線で約30分「大安寺門前」下車徒歩20分)

橘曙覧『志濃夫廼舎歌集』『和歌文学大系74』明治書院、足立尚計『橘曙覧の国学と和歌』『明治聖徳記念学会紀要』復刊17号  
足立尚計『橘曙覧と国学』（NHK放送局編『わたしの橘曙覧論と平成独楽吟』）『和歌のまちづくり事業』実行委員会  
足立尚計『松平春嶽と文学』（三上一夫・舟澤茂樹編『松平春嶽のすべて』）新人物往来社

参考資料等

執筆・協力

福井市立郷土歴史博物館 館長 角鹿 尚計